

『我身にたどる姫君』の女三宮と一品宮

—「岩木」ならねどつれなき女君—

鹿谷 祐子

一、はじめに『我身にたどる姫君』について

中世王朝物語『我身にたどる姫君』は、約五十年という長い作中時間が、御代七代、全八巻にわたって描かれる王朝風の恋物語である。

十三世紀初頭に成立した『無名草子』に記載がなく、文永八年（一二七二）成立の『風葉和歌集』に七首入集しているため、この間に成立したと思われる。

『風葉和歌集』には巻五以降の歌が一首も取られておらず、極官を原則とする詠者の呼称も巻四までに到達した官位等に拠っているため、巻五以降の成立に關しては疑問が残るが、構想上の破綻がないことなどから、少なくとも『風葉和歌集』前後の比較的短期間に、八巻すべてがまとめて書かれたと見てよいだろう。現存伝本は尊経閣文庫蔵本・金子武雄氏旧蔵本・宮内庁書陵部蔵本の三本があるが、全て室町時代末期から江戸時代初期にかけての書写であり、三本間の異同は比較的軽微であるため、共通の祖本から出発したと見られる。

『我身にたどる姫君』では女性の活躍が目立ち、容貌や性質などが母から娘へと受け継がれていく。後掲の系図を参照されたいが、物語冒頭に登場する水尾帝の皇后宮を初めとする三代の女方の系譜（皇后宮—女三宮—後涼殿および皇后宮—我身姫—一品宮）と、水尾帝の中宮を初めとする、中宮—女四宮—藤壺の三代にわたる女方の系譜の対立を軸として、女性天皇や女性の同性愛とい

った、さまざまな個性的な女性像を描出している（1）。

本稿は、『我身にたどる姫君』の主に前半で活躍する女三宮が、後半に登場する一品宮の先蹤といえる存在であり、重要であることを、一品宮との共通点や差異に注目しながら考察することを目的としている。

二、女三宮と一品宮

『我身にたどる姫君』は、巻三と巻四の間に十七年間の空白期間を設ける。巻三までを主な活躍の場とする女三宮は、市古貞次氏によって「第一部（巻一—巻三：稿者注）では女三宮が、我身姫と並んで、重要な役割を果たしているのであつて、二本の線をなしている」（2）と、早くからその重要性が指摘されるながら、研究されることの少なかつた人物である。しかし、巻四以降に活躍する一品宮とともに、「岩木」のように非情ではないけれども、男君からの求愛と激しく葛藤し、ついに自滅に至ろうとも拒絶を貫こうとする強情な女君だ。まず、この女三宮について見ていこう。女三宮は水尾帝の皇女であり、美貌の持ち主である。関白の子息・権中納言が女三宮を慕っており、女房の手引きで契りを結ぶが、女三宮はただ厭わしいと思つて泣き伏すばかりだった。その後、権中納言は女三宮の異母妹・女四宮と結婚するものの、諦めきれず、ふた

たび女三宮のもとへ忍び入る。その場面を次に引用する。

(女三宮は…稿者注)をしたち心うき御心のほどを、わが御ちぎりゆゝしうのみ思ひいでられ給に、まことにいは木になりても、たゞかうめざまきめはみじとのみ、思ひとり給へるに、ひとへの御ぞばかりにまつはれて、みちやうのとにまろびいで給ふを、心にもあらずひかへられて、御ぐしきへひきとゞめられたるを、あさまし、いみじとおほしりたるはてくは御てをうちたゞかせ給ふに、人おどろきてまいりよるけはひすれば、めづらかにあさましきは、きこえんかたなきにも、(権中納言は…稿者注)かばかりにおもひとられたてまつりける身さへぞ、心うくおぼししらるゝ。中納言の君も、はてはあきれいたきまで、ありがたの御こゝろやとあさましければ、たれもにくゝなりて、とかくもてなしきこゆるに、夜もあけがたになりにけり。

(巻三)

ここでは、涙ながらに思いを訴える権中納言に対して、女三宮は「まことにいは木になりても、たゞかうめざまきめはみじ」、つまり「真情け知らずの岩木になつても、こんな心外な目には遭わされまい」と思っている。そして、単衣の衣ばかりで御帳台の外に転がり出て、髪をつかまれると、傍線部のように手を叩いて人を呼ぶのである。

このあたりは、『源氏物語』賢木巻で光源氏が義母の藤壺中宮に強引に迫る場面との類似が指摘されている(3)。「源氏物語」には、「御衣をすべしおきてぬざり退きたまふに、心にもあらず、御髪を取り添へられたりければ」とあり、藤壺も着ているものを脱いで逃れようとするが、髪をつかまれてしまうのだ。しかし、『我身にたどる姫君』の女三宮とは異なり、藤壺は「なつかしき

ものからいとようのたまひのがれて」、つまり言葉で光源氏を退けている。

もとより、このような場合に騒ぎ立てて人々に知られるのは体裁の悪いことである。実際に、権中納言も女房の中納言の君も、女三宮のふるまいには「めづらかにあさましき」「あきれいたきまでありがたの御心や」と呆気にとられるほかなかつた。女三宮は、非常識なふるまいをしてでも、一方的に押し入ってきた権中納言から逃れようとしたのである。

ここで、一品宮に目を転じた。一品宮は、時の帝である我身帝と、その中宮(我身姫)との間の第一皇女として巻四から登場する。我身姫は女三宮とは同母の姉妹であり、一品宮は母やおばとよく似た美貌の持ち主だ。一品宮は、母の厳しい教育方針により同性の女房とも親しく話をすることがない人物として育ち、未婚のまま皇太后宮となるが、甥に当たる一回り以上年下の悲恋帝から思いがけず契りを結ばれてしまう。そして、母への密通の露見を恐れて食事を断つて死のうとし、悲恋帝も一品宮の出家を聞き、心痛から病床に臥してしまうのだ。

「内のうへ、にはかにあさましく」など、院のおほしまどへるさまきこゆるに、とのゝ、「せちにけいすべき事なむ侍」ときこえさせ給へれば、「たゞこの木丁のもとに」とのたまはするに、まいらせ給て、いたくうちけしきばみ、しのびてとおぼしたるを、(一品宮は…稿者注)「あはれ、うき身のうへならんかし。ゆゝしの御心のつれなさや。さばかりのよはひのおほぢおとゞにさへや、うれへ給ひける」とおほしめすに、おくのえびすのくもりなきも、いとらうとましく心うければ、宮はいとらうたてまつらせ給て、御ひぎに御枕をして、さらにうぐかせ給はぬかなしきに、えさしだによらせ給はず。

(巻七)

右は、悲恋帝からようやく事情を聞いた関白（もと、女三宮の密通相手・権中納言のこと）が、取りなしを求めて我身姫のもとを訪れる場面からの引用である。引用文中の「宮」こと一品宮は、悲恋帝が病床に臥す身となったことを知りながら、関白に秘密を漏らした彼を許すことができない。心中で「ゆゑしの御心のつれなさや」などと悲恋帝をなじり、傍線部のように母を傍らから離さなかつた。そして、その明け方に「いかにいきをせじ。めをみじ」と、死ぬことばかりを考えて息を引き取り、悲恋帝もあとを追うように亡くなるのである。

一品宮がこのように極端な性格の持ち主であることは、以前、別の男君からの恋文を届けた女房への態度に表れていた。女房は、一品宮の「あさましう人に似ぬ御心さま」（巻五）、つまり極端な潔癖さを承知していたが、恋文を届けるだけで、すでに二十代後半であり、皇太后という尊貴な位についてもいる一品宮の逆鱗に触れるとは考えていなかったのだ。ところが、一品宮はそれまで親しく召し使っていたこの女房と、人前で目も合わせず、口もきかなくなる。このような一品宮であるから、密通という「うたて心うき御身のたがひめ」（巻七）を、決して許せないと考えても無理はないだろう。

密通相手を厭い、出家する姫君は先行物語にも登場する。しかし、意に染まない関係とはいえ、帝との契りによってこれほど高貴な姫君が死を選ぶという展開は、物語においても史実においても例がないのではないだろうか。

たとえば、『源氏物語』を見てみよう。朱雀院の女三宮は柏木との間に罪の子・薫を出産したあと、夫である光源氏の冷たい視線に堪えかねて出家し、柏木は死去する。女三宮は、軽率な行動から柏木にその姿を垣間見されるという思慮に欠ける人物であり、柏木が死んだと聞いても、「世にながかれとしも思

さざりしを」（柏木）とあるように、さほど悲しまなかつた。このような女三宮の人物像と、柏木が死に至るという展開は、『我身にたどる姫君』の一品宮と悲恋帝に通じるものがある。

また、密通を母に悟られる『狭衣物語』の女二宮は、『我身にたどる姫君』において、一品宮自身に「かゝることそありつれとて、さころもの女二のみのやのやうに、あせ水にてみえきこえんも、こともをろかなることやありけん」と、いわば反面教師のような存在として意識されている。女二宮は男児を出産するが、女二宮の母は、愛娘の密通と出産による心労から命を落としてしまうのだ。その後、女二宮は出家し、母を亡くした後悔から、男児が笑いかけても「見だにおこせたまはず」（巻三）、狭衣のことも寄せ付けなかつた。

このように、両者とも無理矢理契りを結ばれて苦しみ、出家し、以後密通相手に対して冷淡な態度を貫いてゆくが、死ぬことはなかつたのである。

なお、鎌倉時代後期に成立した女流日記文学『とはすがたり』には、後深草院が異母妹の前齋宮と関係を持つ場面が記されている。そのとき、日記の記主であり、後深草院を前齋宮の寝所に導いた女房の二条は、「いたく御心も尽くさず、はやうち解けたまひにけりとおほゆるぞ、余りに念なかりし。心強くて明かしたまはば、いかにおもしろからむ」と書き、前齋宮がたやすく後深草院の求めに応じてしまったことを残念に思っている。二条は後深草院の召人と異なる立場にあつたため、一概には言えないのだが、たとえ上皇が相手であつても毅然と拒絶するようなことが、このころの高貴な姫君に期待されていたといふことがうかがえる。

さて、『我身にたどる姫君』に話を戻そう。小島明子氏は、一品宮について「いささか対人関係を保持する力に成熟を欠くことを感じさせる」と指摘している（4）。これは、先述の恋文を届けた女房に対する厳しい仕打ちや、重体

に陥った悲恋帝を顧みず、死を急ぐような態度から首肯できる。ただし、稿者はこうした「未熟」とも言えるあり方は、なりふりかまわず手を叩いて人を呼んだ女三宮についても同様であると考えている。

それでは、次に女三宮と一品宮の具体的な共通点と差異を考えてゆきたい。

三、「岩木」と「奥の夷」

無骨なもの、情趣を解さないものの喩えとして中世王朝物語によく見られる表現に、「岩木」や「奥の夷」がある。

「岩木（石木）」あるいは「木石」は、『万葉集』巻四の伴家持の和歌に「かくばかり恋ひつつあらずは石木にも成らましものを物思はずして」（七二二）とあり、また『白氏文集』の新樂府「李夫人」に、「人木石に非ず皆情有りとあるように、古くから無骨なものの代表とされてきた。『源氏物語』では、迫ってくる夕霧を避け、塗籠に閉じこもる朱雀院の女二宮が「岩木よりけになびきがたき」（夕霧）と形容されている。また『夜の寝覚』で、帝に捕らえられながらついになびかなかった女主人公を、帝が「いかばかりの岩木ならば、かう思ひ知りきこえさせぬやうは」（巻三）となじったりしている。このように、物語の中で広く用いられてきた言葉であり、『我身にたどる姫君』にも七例の用例がある。

一方、「奥の夷」の「奥」は東国を、「夷」は荒々しい武士を指す言葉であり、現実の世界で武士が台頭してくるにつれて、物語にも登場するようになってきたものと考えられる。大槻修氏などによって、前九年の役や後三年の役の頃（およそ一〇五一〜八七年）から流行した言葉であることが指摘されている（5）。用例としては、『堤中納言物語』の「逢坂越えぬ権中納言」の中にある、男主

人公がつかない姫君への思慕を語る場面で、「心深げに聞こえつづけたまふことどもは、奥のえびすも思ひ知りぬべし」とあるものが早いだろう。『我身にたどる姫君』における用例は三例である。

『我身にたどる姫君』では、全七例の「岩木」の用例のうち、それぞれ二例ずつ、また「奥の夷」は、全三例のうち一例ずつが、女三宮と一品宮を形容するものである。まず、両者に関わらない用例から検討することとし、便宜上登場する順番に番号を付して次に掲出する。

- ① おととほ、うつゝにはおもひよらず、ゆめまほろしの中に、なげの御ことはひとつにだに、またも見給はぬうらめしきは、たれもいは木になりて
すぎぬべきよとは、ちたびやちたびおほししれど、
（巻二）
- ② おくのえびすのくもりなさも、いとどうとましく心うければ、宮はいとどとらへたてまつらせ給て、御ひざに御枕をして、さらにうごかせ給はぬかなしさに、
（巻七）
- ③ 人木石にあらねば、みななさけあるわざを、いかでよしなき色にあはじな
どのみ、おほしめしつゝめば、
（巻八）
- ④ むげにいほけなき御程なれど、山ぐちしるき御さま、なにがしの色にあはじとぞおほしめしうとみしかど、げにいは木にあらざりけんや、御ものわすれこよなけれど、あながちにおほしめしかへしつゝ、あさまつり事はたゆませ給はず。
（巻八）

①の「おととほ」は、権中納言の父、関白である。ここには、水尾帝の皇后宮（女三宮の母）をひそかに慕う関白の苦しい胸の内が語られている。情け知らずの岩木のように物思いとは無縁でいたいと思ひながら、皇后宮への思慕を止

めることができないというわけである。

②の場面は、第二節に既出である。この「奥の夷」は、一品宮が悲恋帝を諭える言葉だ。悲恋帝はこれ以前につれない一品宮を「奥の夷」に喩えているため、②の「奥の夷」という表現には、周囲の人々に密通を知らせてしまった悲恋帝のふるまいこそ、野蠻な奥州の武士のようではないか、と非難する一品宮の気持ちが込められているのだろう。

③と④の状況をあわせて説明しよう。巻七の巻末で、悲恋帝と一品宮が相次いで亡くなったあと、帝位に就いたのは悲恋帝の弟宮である。彼は兄と同じ過ちを繰り返すまいとして、③に「いかでよしなき色にあはじ」とあるように、木石の如く特定の女性に情けをかけようとしなかった。ところが、その決意を忘れたようにある姫君に夢中になってゆく。そこで、④では語り手がそのような帝を、「げにいほ木にあらざりけんはや」とつまり「本当に岩木ではなかったからだろうか」と推し量っているのだ。

それでは、女三宮についての用例を見ていきたい。

●宮は、たびかさなるまゝに、人の心もつらう、いみじうおぼしうとまるれば、さらば一ことの御いらへだにしまはず、れいのいみじき御けしきなるを、(権中納言は…稿者注)そゝら心かかへもてしむる心もうせはて、なくくうらみきこえ給ふさま、**いは木もなびきぬべきも、げにおくのえびす**をつくれらん心ちするには、なにのかひなし。(巻三)

●をしたち心うき御心のほどを、わが御ちぎりゆゝしうのみ思ひいでられ給に、まことに**いは木**になりても、たゞかうめざましきめはみじこのみ、思ひとり給へるに、ひとへの御ぞばかりにまづはれて、みちやうのこにまろびいで給ふを、(巻三)

右の二例はひと続きの場面である。

前者の用例の場面では、権中納言が女三宮(引用文中の「宮」)の寝所に忍び込み、情け知らずの岩や木であってもほだされてしまいそうな様子で思いのたけを訴えている。しかし、女三宮は無骨な奥州の武士のようにかたくなな態度を崩さず、かいがなかった。業を煮やした権中納言が無理に思いを遂げようとする、女三宮は、後者の用例に見えるように自身が本当に岩や木になっても構わないと思い、単衣の衣装ばかりで逃げようとする。つまり、ここでは頑として権中納言を受け入れない女三宮の強情さが、「岩木」や「奥の夷」に喩えられているのである。

次に、一品宮について。左の例は、いずれも悲恋帝から契りを結ばれた一品宮が、食事を断つて死んでしまうまでの間のものである。

●(悲恋帝が…稿者注)げにきえいるばかりむせかへらせ給御さまは、(一品宮は…稿者注)**いは木**ならねば、御覽ししらるゝにや。されど、我御身のほど、女院の御心などをおぼしめすに、たゞしなぬを、あさましうゆゝしとのみおぼしいらるゝには、なにのかひなし。(中略)

「又や世にかゝるかなしき恋すると人のとへかしうれへだにせん
おくのえびすにも、きかせまほしうぞ侍」と、ひきつこかしきこえさせ給へど、なにのかひなし。(巻七)

●うへはほれぐしく、ひがごとせさせ給ぬべきは、またほかも御覽せられぬに、れいの御ことそゝのかしきこえさせ給。(一品宮は…稿者注)つれなく、**いは木**にのみもてなさせ給まゝに、我御身ながらあさましく、うとましくもとおほししらる。(巻七)

前者の用例は、密通直後の悲恋帝と一品宮の様子であり、後者の用例はその翌日、悲恋帝、一品宮、悲恋帝の父院、一品宮の母女院らが一堂に会し、管弦の遊びなどに興じている場面からの引用である。

前者には、一品宮は岩や木のように情け知らずの身ではないから、今にも死んでしまいそうな様子で恋心を訴える悲恋帝の気持ちがわからないわけではない、と書かれている。しかし、母がどう思うかと考えると、一品宮の心には死以外の選択肢はなく、悲恋帝が「無料な奥州の武士であつても、心を動かされるはずだ」と訴えてみてもかいたがないのだ。また後者では、気をひこうとして琴などを勧める悲恋帝に対して、一品宮は自身が岩や木のようにつれなく振る舞っていることを「情けなく、厭わしい」と自責している。そして、緊張のあまりこの直後に倒れてしまうのである。

ここから、一品宮が実は人間的に未熟で極端に潔癖なだけの人物ではないことがわかる。一品宮は悲恋帝の思いを知り、そ知らぬそぶりを続けていることを心苦しく思っているのだが、そのような内心の動揺を必死で隠して平静を装う態度が、幼い帝の目に、非情な「岩木」や「奥の夷」のように見えているのである。そして、悲恋帝が周囲の人々に事情を漏らしてしまつたことが、誇り高い一品宮を傷つけ、その態度を硬化させることになつたといえよう。

同様のことは女三宮についても言える。女三宮は、権中納言から何度文を送られても一度も返事をせず、権中納言を嘆かせていた。しかし密通のうち、権中納言と女四宮の婚儀がいよいよ明日に迫つた日にはふと文に目をとめ、同じ紙の上に「憂き夢も変る契りもさまさまに……」（巻三）という、望まぬ結婚をする権中納言に同情するような和歌を書き付けている。また、権中納言が再び女三宮との密通に及ぼうとしたときは、最終的には手を叩いて人を呼ぶという

行動に出るのだが、はじめのうちは権中納言の言葉に涙を流し、彼に和歌を詠みかけてもいたのである。

このように、女三宮も一品宮も心の底から情け知らずの姫君ではなく、周囲の状況などによって、やむを得ず強情な態度を取ってしまったと言えるだろう。

四、『我身にたどる姫君』における位置づけ

さて、「岩木」も「奥の夷」も、前節の冒頭で述べたように中世王朝物語にはありふれた表現だ。しかし稿者は、これらの言葉が『我身にたどる姫君』において女三宮と一品宮を関連づけるメルクマールであると考えている。『我身にたどる姫君』が多くの密通を描く作品であることは論を待たないが、他の女性登場人物が「岩木」や「奥の夷」という言葉で形容されることはないからである。

本節ではまず、正式な婚姻関係にあるため「密通」と言ってしまうと語弊があるが、契りを強いる相手を忌避する女君として、悲恋帝の母・藤壺について見ていくこととする。

藤壺も一品宮と同じく、巻四から登場する人物だ。その両親は、女四宮と権中納言である。藤壺は三条帝に入内し、二人の皇子を出産するものの、帝の寵愛は女三宮の娘で美しい後涼殿に傾いている。このため、藤壺は夫の愛を後涼殿などと争うことを諦め、巻七では太皇太后宮として、幼い悲恋帝の政治を支えることに心を砕いている。藤壺は、退位後の三条院が同居を望んでも明言を避けて内裏住みが続けており、男女関係は「いまはむかしばかりにわすれはつる御なからひ」（巻七）であった。ところが、距離を置かれていることを残念に思つた三条院から、思いがけず契りを結ばれてしまうのである。

このことについて、藤壺は「女の身のくちおしき物なりけり」と感じている。また、その心情は「わざとあるまじからむことのやうに、いみじうくちおしう、御身にきずつきぬる心ちぞせさせ給」とも述べられている。「体に傷がついたようだ」という表現から、藤壺の悔しさのほどがうかがえよう。夫であり上皇でもある相手に対するものとしては、異例ともいえる激しさだ。藤壺は無事に男皇子を出産するとあつさり内裏に戻り、「いとあさましうねたう」と、三条院を悔しがらせている。

このように、夫である三条院から契りを結ばれることを厭い、あくまでも三条院を避けて続いている藤壺だが、女三宮や一品宮とは異なり、三条院や女房などの周囲の人々から「岩木」や「奥の夷」という言葉で形容されることはない。それは、次のような藤壺の「御くせ」、つまり常日頃の身の処し方によるのではないだろうか。

(藤壺は…稿者注) 御心にこそ、とまかまかうぎまにおほしつぐれ、いづもうちむかひきこえさせ給ぬる程は、人よりもけにうらもなくらうたげなる御くせなれば、ましてのこりすくなき御たいめんにもあらんと、心ほそくおほざるままに、この頃はひたすらうらくと、うつくしき御もてなしには、(二)三条院は…稿者注) れいのわくる御心もうちわすれて、この宮がちにおはしますも、きくの色やいとおしからん。(巻七)

右の引用文には、懐妊した藤壺の三条院への態度が記されている。傍線部に「御心にこそ、とまかまかうぎまにおほしつぐれ」とあるように、藤壺は、心の中では無理矢理契りを結ばれたことを悔しく残念に思い、傷ついている。しかし、実際にそのような気持ちを言葉や態度に表すことはない。「うらもな

らうたげなる御くせ」、「ひたすらうらくと、うつくしき御もてなし」という箇所からわかるように、三条院に直面すると、隔てなく、穏やかに、あくまでもかわいらしくふるまうことを常としていたのである。

このような身の処し方は、権中納言に対する女三宮や、悲恋帝に対する一品宮の態度には見られないものだ。巻七では、一品宮と悲恋帝をめぐるストーリーと、本節で見た藤壺のエピソードがほぼ交互に展開しているため、心ならずも契りを結ばれた際の、藤壺と一品宮の対照的な身の処し方が印象的である。一品宮も藤壺のように激しい感情を理性で抑えることができれば、時の帝と皇太后宮の相次ぐ死、という未曾有の悲劇は回避されたかもしれない。しかし、そうではないところが「岩木」や「奥の夷」という言葉で形容される所以であろう。

以上で、女三宮も一品宮も、「岩木」「奥の夷」という言葉を冠せられるほど強情な姫君として、『我身にたどる姫君』において特徴的な存在であることが確認できた。次に、しばらく「数珠」に注目して女三宮と一品宮の描かれ方を追ってみよう。

巻五には、式部卿宮の子息である右大将が、偶然一品宮を垣間見する場面がある。このとき、一品宮は母の譲りを受けて皇太后宮に立ったばかりだった。

さうじのすこしあきたるより、くまなくみゆるさま、むかしまごひにしたましるは、なをよろしうやありけん、たゞいましぬるこゝちぞする。(一品宮が…稿者注) けうそくにをしかりて、御おこなひにや、御すもたせ給へる、かずひきやらせ給ふとて、まつはれたるをひきなをさせ給御てつきなど、すべていはんかたなくみゆるに、さこそいへ、けぢかくりしなごりのかなしさにや、よそのおもひはをのづからたゆまれつるを、とりか

へしもえつきぬる心ちぞする。

(巻五)

巻四で亡くなった父・我身院の供養であろうか。一品宮は数珠を手を持ち、傍線部のようにからまつた玉を指で繰り直している。右大将は一品宮に以前から思いを寄せていたが、後涼殿中宮とひそかに契りを結んだことがあった。その「けぢかかりしなごり」によって、「よそのおもひ」こと一品宮への思慕は下火になっていたのだが、障子の隙間から灯りに照らされた一品宮の美しい手を見たことで、右大将の恋心は再び燃え上がるのである。そして、この右大将が一品宮への恋文を女房に託したことが、第二節で見た、潔癖な一品宮の怒りを買うことにつながるのである。

さて、女三宮にも、数珠を持つ手の美しさが見ているものの目を奪うという描写がある。それは、巻二ではじめて権中納言に入り臥される場面の直前に置かれている。

御おこなひにのみ御心いりて、けさもいつしか御てうづまいりて、はなれおはします程なれば、いとよきほどみて、せちにぎこゆれば、(女三宮は…稿者注)御かほうちにはひて、ともかくものたまはせず、くろき御すゞにへたる御てつき、なをいふはをろかななり。もたせ給へる御経まで、ひかりはうつる心ちして、めもかへずぞまもらるゝや。(巻二)

女三宮の母は、巻一で亡くなっている。その母のためであろうか、女三宮が勤行を行っているところへ、女房の中納言の君が権中納言の文を届けに来るのだ。中納言の君が熱心に返事を求めても、女三宮は赤くなるばかりで何も言わない。朝の光の中で、黒木の数珠に映える女三宮の白い手の美しさが、傍線部

のように中納言の君の目を通して印象的に描かれている。そしてこの後すぐに、女三宮はこの女房の手引きにより、権中納言から契りを結ばれてしまうのである。

数珠を持つ手に関するこれらの描写は、『源氏物語』の光源氏や、『狭衣物語』の狭衣大将の描写に抛るものだろう(6)。また、女三宮と一品宮では、朝の光の中と夜の火影のもと、女君を見ている人物も女房と恋心を寄せる男君という違いがある。しかし、どちらの場面でも、数珠は秘密の恋と結びつき、女君の手の美しさを引き立てる小道具として使われている。ここからも、女三宮が一品宮の先蹤として意識されていると考えられるのである。

それでは、なぜ『我身にたどる姫君』には、女三宮や一品宮のように未熟で強情な姫君が繰り返し登場するのだろうか。本稿ではこれまで、女三宮と一品宮の共通項を主に指摘してきたが、相違点ももちろんある。相違点に注目することで、その意図は見えてくるだろう。

女三宮は権中納言に密通され、そうとは知らない父・水尾院によって、権中納言の父・関白に降嫁する。実は、水尾院は女三宮を将来有望な権中納言と結婚させたいと思っていたが、女四宮の母が我が娘と権中納言との婚儀を強行してしまったため、女三宮を、かなり年齢の開きはあるものの関白に降嫁させるのである。女三宮はかつて権中納言に入り臥されたとき、手を叩いて人を呼んだ。いわば「世づかぬ」姫君だったのだ。しかし、関白に降嫁し、「殿には、宮もやうくよづきたる御もてなしなれば」(巻三)とあるように北の方として落ちついてくると、そのような思いやりのない態度を取らなくなるのである。

(女三宮は…稿者注) なかくいまは、ありしばかりの物のなさけなく、よろづをきゝいれ給まじき御身ならぬにや、人にだにしらせず、おこつり

やりてんとぞおほしかまふる。(権中納言は…稿者注) ながき夜なれど、くらぶの山のかひなきは、ありしよりけに心のみまどひて、きこえやり給はずむせかへり給ふまぎれに、
(巻三)

これは、父関白の留守を狙って権中納言が女三宮のもとに忍んでくる場面からの引用である。女三宮は、傍線を付したように「娘時代のように思いやりなくはねつけることはできない」と考え、誰にも知らせずに権中納言をなだめて帰そうとしている。しかし、そのもくろみは失敗し契りを結ばれてしまい、その後涼殿を身ごもるのである。

このように、関白と結婚した女三宮は、「岩木」や「奥の夷」という言葉で喻えられるような性質、つまり心の底から非情ではないが、強情な態度を取ってしまう未熟さ、といったものを失ってゆく。この変貌は『夜の寝覚』の女主人公を彷彿とさせるものだ。『夜の寝覚』の女主人公も姉妹の夫となる人と関係を持ち、親子ほど年の離れた男性と結婚する。そして、中間欠陥部分にあたるため詳細は不明だが、妻として、また母としてふさわしい人物へと成長を遂げたようなのである(7)。

このような女三宮に対して、一品宮は変わることがない。悲恋帝に契りを強いられた一品宮は、悲恋帝の気持ちが変わらないわけではなく、岩木のようにふるまうことを心苦しくも思っている。しかし、自身を未婚のまま皇太后宮とした母の高い期待に背くことに堪えられず、ついに自ら命を絶ってしまうのである。ここに、女三宮と一品宮の明らかな差異があると言えよう。

本稿の冒頭で触れたように、長い作中時間を持つ『我身にたどる姫君』において常に語られているのは、水尾帝の皇后宮を初めとする女方の系譜と、同中宮を初めとする女方の系譜の対立である。折しも、『我身にたどる姫君』が作

られたであろう鎌倉時代後期の宮中は、両統迭立の萌芽となる不穏な緊張をはらんでいた。『我身にたどる姫君』が、女三宮から一品宮へという流れの中で、力づくで契りを結ばれることを未熟なほど強情に厭う姫君を通して示そうとしたことは、あらゆる対立は悲劇しか生まぬ、という世の中への警鐘ではなかったのだろうか。これについては、一品宮と悲恋帝の関係性に着目して、別稿にて論ずる予定である。

五、おわりに

皇女を獲得することは権力の獲得・拡大につながり、優れた資質を持つ父帝鍾愛の皇女は、貴公子たちの憧れの的だった。皇女と密通というテーマは物語において繰り返し描かれており、現実の世界でも同様の例を見つけることができる。しかし、高貴な姫君は男に入り臥されても、自らの体面や相手の男性に恥をかかせないことを考えて、手を叩いて人を呼ぶなどということはしないのが普通である。また、「死んでしまいたい」とは思っても本当に自ら命を断つことはない。本稿では、この点において『我身にたどる姫君』の女三宮と一品宮が

特異であり、「岩木」「奥の夷」という言葉や「数珠」の用いられ方などから、両者の関連が示されていることを指摘した。ただし、女三宮は結婚を機に成熟し、情趣を解さないようなふるまいは影をひそめる。かわって登場するのが一品宮だ。

また、女三宮や一品宮のような女性像が『我身にたどる姫君』において必要とされた意図については、物語を基底する女性同士の対立が背景にあると考えられている。

注

(1) 小島明子『我身にたどる姫君』皇后宮の女系考―一品宮の問題を軸に―(『国語論文』73―10、二〇〇四年十一月)

(2) 市古貞次『中世物語の展開』(『中世小説とその周辺』東京大学出版会、一九八一年)

(3) 徳光澄雄『我身にたどる姫君物語全註解』(有精堂、一九七八年) 145頁、注8。

(4) 注(1)前掲論文。

(5) 大槻脩『在明の別の研究』(桜楓社、一九六九年) 412頁。

(6) 雁の連ねて鳴く声楯の音にまがへるを、うちながめたまひて、涙のこぼるるをかき払ひたまへる御手つき黒き御数珠に映えたまへるは、古里の女恋しき人々の、心みな慰みにけり。
『源氏物語』須磨

・面杖をつきて、水の底を深くながめ入りたまへるまみのけしき、言ひ知らずもの思はしげにて、数珠もてはやされたる腕つきなど、世に人のなべて持たらぬ数珠のやうに、めづらしうつくしげなり。
『狭衣物語』卷二

(7) 結婚後の『夜の寢覚』の女主人公について、たとえば『無名草子』には次のような記述がある。

・大臣に、入道の許し取らせたまひしほど、大将の、千々の言葉を尽くして、率て隠してむと苛れ採まれたまひしに、身をは千々に砕き、命も絶ゆばかり思ひ沈みながら、心強く靡かで、我も人も人聞き穩しきさまにもて鎮めてやみたまひしほどは、いみじき心上衆とこそおぼゆれ。

*本文の引用については次の通り。

・『我身にたどる姫君』…鎌倉時代物語集成(二部、表記を私に改めた)

・『源氏物語』『狭衣物語』とはすがたり『万葉集』『夜の寢覚』『堤中納言物語』『無

名草子』…新編日本古典文学全集

『我身にたどる姫君』主要登場人物系図

* () は重出者。△は密通を、①⑦は皇位継承の順番をあらわす。

